
A Forked Road

八神 直斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A F o r k e d R o a d

【Nコード】

N 5 3 4 3 E

【作者名】

八神 直斗

【あらすじ】

高校受験を控えた侑希たちに、避けられない別れが迫る。いつまでも友達。その言葉が繋ぐ絆。しかし侑希は、完全なる別れを決意するが……。

きっかけ

この世の中でもっとも強い人間は
孤独に耐えられる人間である
ヘンリック・イブセン

私はいつも独りだった。友達と呼べる友達もいなくて、もちろん彼氏なんてもつてのほか。いや、友達はあるか。私が無理やり関わることをやめただけで。

中学の時にはいつも10人近くの友達と一緒にいた。休み時間になったら他愛のない話をして笑いあって、毎日が楽しかった。

いつからだろうか、私が彼女たちと関わらないように必死になり始めたのは……。そうだ、あの時だ。それは私が高校受験で一人違う学校に進学しようと決めたとき……。

「え？侑希は寺大行くの？」
てらだい

中学3年の夏休み。私たちは部活で学校の美術棟にいた。夏休み明けにある文化祭の出し物として、私たち美術部は個人、もしくは数人のグループで展示をすることになっていた。私は仲のいい5人で集まって、展示物を創っていた。

朝から学校に集まって、午前中は体育祭の看板、オブジェ、ポスター作り。午後は展示物の制作に取り掛かることになっている。今は午後の活動の準備のための中休み。つまり、昼食時間。5人とも昼食を取り終え、雑談をしていた。しかし、中学3年生の会話にはやっぱり進路の話が入ってくる。私たちもそれに漏れることなく進路の話題が持ち上がった。

友達のほとんどは、地元のさして学力の高くない高校、たかむら高邑高校に進学すると言っていた中で、私ともう一人の子はみんなと違う高校に進学を決めていた。

てらだい寺大とは高校の名前で、私の地元のなかで、三本の指に入る名門校。私は将来医者になろうと思っていたので、友達のほとんどが行こうとしている高校では、少し辛いものがあるだろうと、みんなと一緒に同じ学校で高校生活を送ることを諦めた。

「うん。みんなは高^{たか}邑^{むら}でしょ？」

「そうだけどさー。あー、でも侑希は医者になりたいんだもんね。高^{たか}邑^{むら}じゃねー？」

「・・・そだね」

「佳代は？高^{たか}邑^{むら}じゃないんだよね？」

「私は・・・宮^{みや}一^{いち}かな」

急に話を振られたことで、少し肩を揺らして少し困ったように言

う彼女は佳代。私たちの中でもしっかり者の方に入る。

「佳代の将来の夢って何？」

「私ね、社会の先生になりたい」

少しきょとんとして答えた佳代に、彼女たちはそうなんだ。と頷いた。本人は何でもないように装っていたが、私には佳代が何か決心をしたように見えた。開き直ったように、何かを投げたように、凜として答えている彼女を私は初めて見た。そしてどこか、悲しそうにも見えた。

T
O

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

始まり

その日の帰り道、美咲と佳代と私は、別れ道で固まって話をしていた。

美咲は副部長と言ったこともあって、部活の話から他愛ない話まで、気の済むまで喋った。

「侑希、寺大について色々教えて」

暫く話をした後、突然美咲が言い出した。すると佳代があ、と声を上げた。

「私、塾あるからもう帰るね」

ばいばーい。と手をふって帰って行く佳代。私たちは佳代が見えなくなるまで見送った。

すると美咲が真剣な顔で私に言った。

「侑希、私さ、変なところでカンがいいの知ってるよね？」

「うん、知ってるけど……」

「佳代について何か知ってるよね？教えて」

美咲は確かに鋭かった。特に無理に何でもないように振る舞う友達を見分けるのが。私が知っている事は何もない。ただ私も感づいただけだ。今の美咲のように。

「何も知らないよ。何も聞いてないもん」

「嘘。絶対知ってるよね」

「知らないよ、何も」

美咲は暫く私を見つめていた。

私はなんとなく決まりが悪くて、俯いていた。

美咲は何か思いついたのか、ちよつと待ってて。と私に言いおい
て自分の家に入って行った。

そのまま帰ってしまおうかと思っていたが、私が決意するよりも
早く美咲が戻ってきた。

「侑希。今日何にも用事なんてないよね？」

「うん。ないけど……何？」

「ちょっと私の部屋でお話しようね。ついでに夕飯も食べてって。それから明日部活でも登校日でもないよね？何なら泊まってけ」

満面の笑みで一氣にまくし立てられ、こくこくと首を縦に振るこ
としか出来なかった。

美咲のお母さんに挨拶をして、さっさと部屋に招き入れられる。
私は電話を借りて家に電話をした。後で、母が挨拶もかねて着替
えを持ってきてくれることになった。

美咲は着替えを済ませ、二人でベッドに並んで座った。暫く沈黙
が続いたが、先に口を開いたのは美咲だった。

「ほんとに知らないにしても、何か気づいたことくらいはあるんでしょ？」

やっぱり勘が鋭いだけはある。確かに私は佳代から何も聞いてない。ただ、彼女の言動と雰囲気からなんとなく察しただけの、確信に近い憶測だけはあった。

あの子は何か無駄な心配をしていて、何かに怯えている。以前の彼女なら怯える必要のなかった何かに。

しかし、憶測だけで言ってしまうえば美咲に余計な心配をかけてしまう。私は、どう答えようか迷っていた。

「ねえ、侑希？」

「憶測でこんなことを言うのは気が引けるんだけど……。佳代、何かいらない心配してると思うの。それから、何かに怯えている様にも見える。入試なんて関係なかった頃の佳代だったら、私には関係ないって言い張れるようなことで……。あー、何言ってるか分かんなくなってきたけどなんとなく、でも高い確率でそう思うの！」

思っていたことを一気に言い終わった私は、美咲の顔を見る事が出来ずにいた。

私は、ずっと黙っている美咲の顔を恐る恐る覗いてみた。

「美咲・・・・・・・・？私何かへんな事言っただ・・・・・・・・？」

「侑希・・・・・・・・。あんた、だから怖がられるんだよ・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・っえ？」

T
O

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5343e/>

A Forked Road

2010年10月8日13時31分発行